『中国地区英語教育学会研究紀要』 No.33 (2003)

規則習得とコミュニケーション

柳瀬陽介（広島大学）

要約： 本論文では、言語習得・使用に関する規則の種類を整理し、Chomsky の言語哲学とも、私たちの日常的体験とも整合する規則論を提示し、第二言語習得におけるコミュニケーション経験の必然性について論考する。1 では Krashen 以降の規則論を検討し、(1)「コミュニケーションの学びは、基本的にはコミュニケーションを重ねることではないのか」、(2)「形と意味を結びつける規則には意識的なものもあるのではないのか」という問題点を提示する。2 では(2)の問題点を解決する新しい規則論を展開する。3 では「発話規則」の実践上の問題を考える中で、(1)の主張が、単なるトートロジーを超えて、正しく妥当なものであることを論証する。

1 先行研究の検討と問題設定

規則と言語習得に関する Krashen(1982)の説は、その後の多くの議論を引き起こした。ここではその影響のすべてについて叙述する余裕はないので、後の立論と関係のある the input hypothesis と the monitor hypothesis についてのみまとめることとする。

1.1 The input hypothesis への批判

Krashen(1982)は、理解可能な入力（comprehensible input）が主要な言語習得の途であり、話し、書く能力は自ら「創発する(emerge)」ものだとした。彼は入力を「最も重要(of primary importance)」とはしても、必ずしも入力以外の要因を否定したわけではない(Krashen 1982: 32)。だが彼の主張は、しばしば入力のみの肯定とみなされ、後の研究者による批判的論考を招くこととなった。

Long (1983)は、入力がそれ自体だけで理解可能になることは常には成立しないとして、言語能力に優る対話者からの negotiated modification がしばしば理解可能な入力をもたらすと主張した。Swain (1985, 1995)は、入力およびそれに伴う修正が言語習得に果たす役割は強調されすぎだとして(Swain 1985: 236)、出力の役割が重要であることを主張した。彼女のまとめによると出力には(1)気づき(noticing)・引き金(triggering)、(2)仮説検証、(3)メタ言語的省察の機能があり(Swain 1995: 128)、出力も言語習得の必要条件であるとしている(Swain 1985: 252)。彼女は"one learns to read by reading, and to write by writing."という言葉を引用して、"Similarly, it can be argued that one learns to speak by speaking."(ibid 248)と述べているが、Swain 自身も決して否定していない Krashen よる入力の重要性の強調からすると、"One also learns to speak and write by listening and reading."ともいえる。これらをすべて大胆に総合すると"One learns to communicate by communicating."であるとも表現できるであろう。むろん"One learns to communicate by

communicating."といった言い方は一種のトートロジーであり、真ではあるがそれだけでは何ら命題以外の新しい内容を伝えるものではない。だが、この論文では、後に「コミュニケーション」という概念の含意を明らかにし、このトートロジーを単なる不定詞の動名詞による言い換え以上に、正しく妥当なものであることを示す。

1.2 The Monitor hypothesis への批判

Krashen(1982: 30)は、意識的に学習された言語規則は、発話のモニターとしてのみ働くだけであり、言語習得には無関係であるとした。モニターとしてのみ働くということは、いわゆる文法教授を言語習得の観点からは全面否定したものとなり、この主張はその後多くの批判を呼んだ。後年の研究者にとっては文法の明示的な学習の言語習得における役割をうまく説明することが大きな課題となった。

その課題に最もうまく対応した論考の一つが Yamaoka (2000)であろう。彼は意識的に学ばれた言語規則を formal rules (別名 linguistic knowledge) と呼ぶ。これは"descriptive rules of grammar"であり(ibid 147)、事実上私たちが学校文法書で見る言語規則であると考えてよい。彼はこの formal rules を mapping rules (別名"psycholinguistic knowledge") と区別する。この mapping rules とは、意味と形を結びつけるものである。だがこの mapping rules は subconscious で inaccessible な process であり、明示的に product として提示される formal rules とは対比されている(ibid 148-9)。彼によれば意味と形は、mapping rules の機能を通じて結びつくのである (Form and meaning are not directly associated; they are associated through the function of mapping rules. (ibid 152))。

しかし意味と形を結びつけるのが mapping rules だとしたら、それは必ず subconscious あるいは inaccessible なものでなくてはならないのかという点は、疑問として残る。もちろん山岡が想定していた"form"とは、主として文であり、それは自ら内部構造を持つものである。そうなると意図する意味を適切な内部構造に構成し表象する規則（すなわち彼のいう mapping rules）は、複雑精妙なものであり、私たちの内観には明確な姿を現さないものとして想定される他ないのかもしれない。だが形(form)には語彙という形態論的構造しか内部構造を持たない（つまりは統語構造をもたない）項目もある。また定型表現という、内部（統語）構造を固定した項目（いわば、一つの長い語彙としても考えられる項目）もある。このような語彙、定型表現といった形と、それらの意味を結ぶ規則も subconscious で inaccessible なものでなくてはならないのだろうか。少なくとも私たちは「○○(=intended meaning)と言いたいときは××(=linguistic forms)と言う」といった形で語彙や定型表現を習得していないだろうか。こういった規則は心理的に explicit で直接習得可能なものだと考えられる。次のセクションでは、言語習得・使用にかかわる規則について考え直し、今話題にした規則を含む規則論の全体像を仮説的に提示する。

2 諸規則の分類

このセクションでは言語習得・使用に関する規則を、言語規則と言語使用規則に分け、前者をさらに I-言語規則と E-言語規則に、後者をさらにパフォーマンス・システム規則と発話規則に下位区分するという規則論を提示する。

2.1 言語規則

まずは「言語規則」(language rules)の規定から始める。「言語規則」の考えは、基本的

にチョムスキーの言語哲学に即したもので、「言語」を自律した体系とみなし、「言語規則」は、その自律した体系の中だけで成立する規則だと定義する。つまり、外の世界との結びつきや言語使用者の志向性(intentionality:心がある対象に向かう働き)を考察の要因とせずに、形式的に成立する規則のことである。自然科学として言語学を構築する Chomsky は、ある人間がその属する世界の中での諸関係に基づいて「言葉を話す」(language speaking)といった日常的な現象は、自然科学としての言語学の対象ではありえないとして(Chomsky 2000: Ch. 2)、"some amorphous region in a highly intricate and shifting space of human interests and concerns" (ibid 22)を排除した言語学理論の構築に努め、そしてそれを 30 年以上にわたって継続発展させている。ここではそのような言語学理論によって表象される規則を「言語規則」と呼ぶこととする。

その「言語規則」は、「I-言語規則」(I-language rules)と「E-言語規則」(E-language rules)に分けることができる。I-言語規則とは UG(Universal Grammar)を基盤として、それぞれの文に構造的記述(SD: structural descriptions)を与えて、その文を処理（発話・解釈）することを可能にする生成的手続き(generative procedure)に見られる規則性を表現したものである(ibid 26) [1]。I-言語（規則）は物理的・生物的基盤を持っており、その存在が、言語使用を根底のところで可能にしている。

> The I-language is a (narrowly described) property of the brain, a relatively stable element of transitory states of the language faculty. Each linguistic expression (SD) generated by the I-language includes instructions for performance systems in which the I-language is embedded. It is only by virtue of its integration into such performance system that this brain state qualifies as a language. (ibid 27)

このような脳内状態である I-言語は、パフォーマンス・システムに組み込まれて言語使用の基礎的処理を行う。I-言語規則は、そのような I-言語の理論的表象である。私たちが視覚において、自らの正確な脳内状態の自覚も、その理論的表象もできずに、ただ見ることができるのと同様に、私たちは言語使用を行う際に、I-言語を自覚せずに、またその理論的表象も行わずに、ただ言葉を使う。この意味で I-言語規則は、心理的には implicit であり、理論的には、Chomsky が目指すところによるならば、現象を余すところなく説明するという意味で explicit である(Chomsky 1965)。

このような I-言語規則は、英語教師が通常「文法」という言葉で想像するものとはかなり異なっている。英語教師のいう「文法」とは、言語が外に現れた形において私たちが表層的に観察できる規則性のことである。この規則は、表層的な観察にしか基づいていないので、理論的にすべてを解明しようとするものではなく、観察的妥当性あるいはせいぜい記述的妥当性を有するのみであり、その意味で理論的には implicit である。だが一方、これは直接教授の対象となる場合においては、教師、生徒に十分自覚されたものとなり、その意味で心理的には explicit であるといえる。こういったいわば学校文法の規則で、外の世界および志向性を要請しない形式的な規則を、ここも Chomsky にならって E-言語規則と呼ぶことにしよう。

かくして、自律した言語の形式的特性である言語規則は、脳内で働く I-言語規則（心理的には implicit だが、理論的には explicit）と、私たちが表層的に観察する E-言語規則（心理的には explicit だが、理論的には implicit）に分類される。I-言語規則は、現状では必ずしも十分に解明されているとは言えないが、言語使用の根底をなす規則として、私たちはこの規則を想定せざるをえない。それに比べて E-言語規則は、記述において伝統的な蓄積

があるものの、それが心理的実在性をもち、実際にその形で直接脳内において働いているかについては疑わしいことは、Chomsky のみならず Krashen 以降の応用言語学者も認めるところである。

2.2　言語使用規則

私たちが問題提起した「oo(=intended meaning)と言いたいときはxx(=linguistic forms)と言う」といった規則は、以上述べた言語規則とは異なる規則として規定されなければならない。意図された意味において、外の世界や志向性といった要因が入ってくるからである。ここでは、言語規則に基づきながら、実世界で言語使用者の心の動きと共に言語を使用する際に見られる規則性を言語使用規則(language-speaking rules)と呼ぶことする(2)。

この言語使用規則もさらに二つに下位区分される。一つは、I-言語規則と同じように、脳内で実際に行われているはずの言語使用規則であり、これも Chomsky にならって「パフォーマンス・システム規則」(performance system rules)と呼ぶことにしよう。パフォーマンス・システム規則は、I-言語規則を受け継いで、脳内の構造的記述を、現実世界で使うための発話へと転換する規則として規定される。この「脳内で実際に起こっているはずのこと」は、I-言語同様、私たちが正確に自覚できないことであり、心理的には implicit である。理論的には explicit であることを究極の目標としては目指すべきではあるが、現時点でパフォーマンス・システムの解明に向かおうとするのは自然科学としては無謀と Chomsky は考えており("It would also be a mistake, in considering the nature of performance systems, to move at once to a vacuous "study of everything."" (ibid 29)、ここではパフォーマンス・システム規則は理論的にも implicit と規定しておくこととする(3)。

もう一つの言語使用規則は、言語規則における E-言語規則と同様、私たちが日常的に意識し使用している規則、すなわち私たちが主題としている「oo(=intended meaning)と言いたいときはxx(=linguistic forms)と言う」といった規則である。これは心理的には明らかに explicit であるが、理論的にはこの規則は私たちの日常生活の断片を記述しただけのものであり implicit である。こういった言語使用規則を、ここではパフォーマンス・システム規則と区別して「発話規則」(utterance rules)と呼ぶことにしよう。発話はもちろん、産出されるものであり、かつ理解されるものである。「oo(=intended meaning)と言いたいときはxx(=linguistic forms)と言う」というのは明らかに発話の産出にかかわる規則であるが、発話の理解にかかわる規則としては「xx(=linguistic forms)に接したらoo(=intended meaning)を想起せよ」という形で表現することができる。いずれも形と意味を結びつけている、心理的に explicit で理論的に implicit な規則であることに変わりない。これらを簡略に表記すると

発話規則（産出）：　Say "*u*" if *p*.

発話規則（理解）：　Think *p* if "*u*."

となる。記号表現の *u* は「形」としての utterance を、*p* は「意味」の表象としての proposition を暗示している。この *p* は第一言語で表象される場合が多いだろうが、既知の目標言語で表象される場合もある。ただし *p* が常に完全な命題の形をとるとは限らない。一般的におそらく初学者ほど *p* を明確に意識し、この発話規則を心理的により explicit なものにしているだろうが、熟達者なら *p* は「こういう時」「こんな感じ」という非言語的な認識にとどまる場合も考えられる。したがって発話規則は心理的には explicit であるが、理論的には非常に implicit であるといえる(4)。

以上、言語規則（I-言語規則、E-言語規則）と、言語使用規則（パフォーマンス・システム規則、発話規則）を提示してきた。Yamaoka (2000)との関連でいうなら、彼の言う formal rules (linguistic knowledge)はE-言語規則、mapping rules (psycholinguistic knowledge) は I-言語規則とパフォーマンス・システム規則を合わせたものに相当する。Chomsky は、linguistic knowledge は I-言語であり、I-言語はパフォーマンス・システムとは独立させて考えるべきとしているので、Yamaoka の図式はその点で Chomsky の用語体系と合致しない。また Yamaoka には、本論文でいうところの発話規則に相当する規則はない。

自然科学的にとらえるなら言語使用は、I-言語規則がパフォーマンス・システム規則に組み込まれて執行されることによって可能になっていると想定される。I-言語規則とパフォーマンス・システム規則が言語使用を構成しているのである。しかしこれらの規則は共に心理的に implicit で、日常的には inaccessible である。したがって、これらは明示的に教えることは不可能である。これらの規則が explicit になりうるのは、理論的な意味においてのみであり、仮に言語習得者がその理論を学んだとしても、例えば、日常生活でよりよく「物を観察する」ことができるようになろうとした者が、視覚に関する脳科学理論（例えば外側膝状体と視覚野 V1 の結合のメカニズム）を学んでも困惑するだけと同様に、言語習得者がこれらの自然科学的規則によって、例えば、日常生活でより「雄弁になる」ことはないだろう。だが究極的には脳の物理的作用である言語使用を説明するには、このような自然科学的規則の想定は必要である。その中でも自然科学の常道として、解明しやすいものから研究を始めるために、パフォーマンス・システム規則とは区別した I-言語規則を想定し、そこから自然科学的解明を始めるというのが Chomsky の戦略である。

一方、日常生活の表層的な断片で観察される E-言語規則と発話規則は、その性質上、心理的には explicit であるが、これらだけによって言語使用が可能になるものではない（これが理論的に implicit であることの含意である）。だがこれらは明示的に教えられることによって、日常の言語使用を、部分的に助けることができる。Krashen のいうモニターもこれに相当するだろう。だがこれらの貢献は、いわば言語使用の全体像という氷山の一角であり、私たちの意識の上に現れた現象であるにすぎない。言語使用という脳の働きは、大部分が私たちの意識に上らないままに遂行されている。E-言語規則と発話規則は言語使用を補助しているに過ぎない。これまでの規則論をまとめるなら次のようになる。

表 1：言語習得・使用に関する諸規則

上位区分	言語規則		言語使用規則	
特徴	自律的で形式的		志向性と関係	
下位区分	I-言語規則	E-言語規則	ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽ･ｼｽﾃﾑ規則	発話規則
心理的特性	Implicit	Explicit	Implicit	Explicit
理論的特性	Explicit	Implicit	Implicit	Implicit
言語使用	構成する	補助する	構成する	補助する
習得方法	自然獲得	教授-学習	自然獲得	教授-学習
発見方法	自然科学	日常的分析	現状では困難	日常的発見

こうしてみると、規則習得の必要性という点からすると、I-言語規則とパフォーマンス・システム規則は、必ず習得していなければならない規則であるといえる。だがこれらの規則は心理的には implicit であり、その意味において教授不可能であった。仮に I-言語規則を理論的に教授しても、それは当該認知の向上にはつながらない。またパフォーマンス・

システム規則は想定こそされ、実際的同定は現状ではほとんど望めない。こうなると私たちは意識的な教授-学習が不可能な規則を獲得し、それによって言語使用を実現させていることになる。これは経験主義者的な言語習得観では説明できず、合理主義者的な言語獲得観で説明せざるをえない(Chomsky 1965: 51) [5]。

私たちは言語獲得の条件を整えることができるだけで、言語をすべて教えてしまうことはできないということは、第一言語獲得の場合、適切な言語入力（およびそれに伴う言語交渉）の環境を与えれば後は脳が自力で言語獲得に成功するということである。臨界期および言語入出力の量の点で不利な第二言語習得の場合は、シュリーマン(1954)、ロンブ(1981)、近江(1988)、クラーク(1993)、鹿野(1999)、鄭(2000)、国井・橋本(2001)といった実践家の言葉を仮に信じるとするなら—信じてはいけないという積極的な理由は現在特に見当たらない—、音読やシャドーイングといった集中的な入出力練習を繰り返すことにより脳が自力で言語獲得の基本的な部分において成功するということであろう [6]。

一方、E-言語規則と発話規則は、必要に応じてのみ習得しておくべき規則で、逆に言うなら必要がなければ習得する必要はない規則とすらいえる。実際、子供の第一言語においてE-言語規則はほとんど登場せず、発話規則の習得も、特殊な用途の言語使用にとどまるものだろう。ところが第二言語習得の場合は、経験上、E-言語規則や発話規則が要求されていることは周知のとおりである。だが反面、E-言語規則や発話規則の習得だけでは、言語を自由に使えないことも私たちの経験が教えることであり、これは、やはり言語獲得の根幹は、適切な環境下で「教えられない」規則を脳が獲得することであり、意識的な規則は、その無意識的な規則を補助するだけであると解釈できる。以下、このような言語獲得・習得観のもと、発話規則の実践上の問題点を考えることとする [7]。

3 発話規則の実践上の問題とその解消

3.1 発話規則解釈の不確定性

発話規則に関する実践上の問題点とは、その規則自体が間違っているかもしれないことと、規則自体は間違っていないものの、その規則の解釈に失敗して適用を誤ることである。発話規則自体が誤っているのは、主に学習者が一人でそれを「発見した」場合であろう。無論、多くの場合、学習者は辞書や教師といった権威ある存在によって発話規則を教えられるのであろうが、それにしてもある程度の学びは自ら行わざるを得ない。学習者はこの誤りをどのように修正することができるのだろうか。

次に発話規則を教えられる場合であるが、この場合発話規則自体は正しいものだとしても、その規則の解釈に不確定性があるため、その揺らぎから学習者が規則の適用において誤る場合がある。例えばジーニアス英和辞典を参考にして作成した発話規則として「あなたが聴者に何かを思い出させたい場合は、"May I remind you ...?" と言え」というものがある。ここで考えられる可能性としては、学習者がこの規則を、「思い出させるためならどのような場合にでも使ってよい」と解釈し、この英語表現が時に厳しい催促に聞こえてしまうことをわからずに、社会言語学的な意味でこの規則を誤適用し、聴者の当惑や反発を招くことなどが考えられる。発話規則を、英英辞典を使って、目標言語と同じ言語で記述しても同様の問題は残るだろう。ロングマン英英辞典を参考にして作成した発話規則は 'Say "May I remind you ...?" if you want to make the listener remember something he or she must do'となるが、ここでももし学習者が規則の'make'や'must'の語感を知らなけ

れば、この言語使用規則も誤適用されうる。

まとめるなら発話規則（Say "*u*" if *p*. Think *p* if "*u*."）の場合、*p*に不確定性が残ってしまうということであろう。日本語、英語を問わずに*p*を詳しく述べても、それは解釈の問題を減らすどころかかえって増やすかもしれない。発話規則には発話規則自体の正否の不確定性、および*p*の解釈の不確定性という問題がついてまわるわけである。これらの問題は、教授を徹底するだけでは原理的に解決しにくい問題だといえる。教師が、考えられる限りの発話規則を網羅的に、しかも一つ一つをできるだけ詳しく叙述したとしても、学習者は、今度はそれらの膨大な発話規則叙述の解釈に困惑するだけなのかもしれない。これらの問題の解決は、教授以外に求められなければならない。

3.2 分析哲学的解明

以上述べた問題は、実は分析哲学では定式化され、そして解決の方向性が示されている。ここではその分析哲学的解明を行う。 ウィトゲンシュタイン(1976)は、規則に従う(rule-following)ことに関する問題提起を行った。その要諦は、規則にはその規則の解釈する点で不確定性がある以上、行動を規則が決定してしまうことはありえないように思えるということである。規則に従おうとする者は、はたして自分の規則解釈が正しいのかどうかに迷ってしまうということである。しかしながら、日常生活において、私たちはそれほど問題なく規則に従っているように思える。このパラドクスを解決することは、規則に従うということを個人の心の中だけで行われる（＝<私的に>行われる）こととして考えることを止めることである。

> <規則に従う>ということは一つの実践である。そして、規則に従っていると信じていることは、規則にしたがっていることではない。だから、人は規則に<私的に>従うことができない。さもなければ、規則に従っていると信じていることが、規則に従っていることと同じになってしまうだろうから(ウィトゲンシュタイン　1976:202節)

発話規則の習得は、意識の中だけでは完結しない。発話規則は何度も教授され暗誦されることでなく、何度も適用されることによって完成へと向かう。しかしこの場合の適用とは、相手なしに一人で発話を声に出したりすることではない。それらはむしろ拡張された個人の意識の中の行為とすらいえるであろう。発話規則に従うことを実践として行うということは、自らの意識が他人の意識と交錯する時空間において発話規則に従い、言語を使用するということ、一言でいえばコミュニケーションを行うということである。

コミュニケーションに関しては同じ分析哲学の系譜につながる Davidson の方が、ウィトゲンシュタインよりも詳しい論考をおこなっている。Davidson (2001)はコミュニケーションにおける対話者を「第二者」(the second person)として概念化し、その役割を解明している。コミュニケーションによる発話は、単なる「言いっぱなし」ではありえず、第二者からの有意味な反応を必然的に伴うものである（双方が「言いっぱなし」のように思える対話を、しばしば私たちは「全然話ができていなかった」「全くコミュニケーションがとれなかった」などと表現する)。ここで第二者とは、発話者（第一者）の発話を有意味なものとして解釈し、その解釈に基づいた反応を示すことによって、第一者の物理的にみれば単なる音刺激にすぎないものを、「コミュニケーション」として成立させる存在である。成立させる際には、第二者は第一者の発話をできるだけ有意味なものとしてとらえようとする。これが寛大の原則(principle of charity)である。コミュニケーションは、発話が基本的に真理に基づいている（正しいことを述べている）と仮定されて、参加者が相手の発話に

現実的な意味での最大限の合理性を投影することによってはじめて可能になる[8]。

第二者が、第一者の発話に有意味な反応を示すということは、とりもなおさず第一者の発話に第二者が自らと同じような合理性を見出しているということである。ここでいう同じような合理性を見出すとは、同じように志向している世界のある対象について、大枠において同じくする信念体系を基に、それに関する同意あるいは細かな差異を認めるということである。

このように大枠において同じ信念体系を背景に、第一者と第二者が、共に同じ対象を志向することを Davidson は三角測量(triangulation)と呼ぶ。この三角形の成立は、第一者の発話規則の誤用を防ぐのに重要な働きをする。例えば第一者が、ある（物理的・心理的）出来事（E）を p の解釈適用例だとみなして"u"と発話する。だが、このままでは p の解釈適用例として E が適切であるかどうかがわからない。しかし同じように E を志向し、大枠において信念体系を第一者と共有する第二者が、その発話に何らかの有意味な反応（同意、細部の異論、等）を示せば、第一者は基本的に E が p の適用例として成立することを確認できたこととなる。後は細部の異論などが、p の E への適用から由来しているのか、それとも第二者特有の信念から由来しているのかを第一者は忖度すればよい。だが基本的にこの発話が正しかったことは第二者からの有意味な反応によって保証されている。逆に第二者が理解不能の表情や全面的否定などを示したならば、E が p の適用例としては適切でないことを知ることになろう（第二者特有の信念の存在によって、第二者が全面否定をするならば、第二者はおそらく彼特有の事情を第一者に説明するであろう。さもないとその第二者は非合理的な存在としてとらえかねないからである）。

発話規則の習得は、個人の意識の中だけで終結するものではない。それは p の適用例として考えられる出来事（E）が生じている共有された世界と、その世界において大まかに第一者と信念体系を共有する第二者、およびその第二者の反応を必要とする。一言でいうならコミュニケーションを必要とするということである。第一者が p の適用例を自ら探し（あるいは E に対する適切な p を探し）、"u"を発話し、その発話に対する第二者の自由な反応を待つというのが、ここでいうコミュニケーションの基本構造である。

またコミュニケーションも同じ第二者ばかりとでなく、大まかな信念体系は同じでも、細部の諸信念において異なる別の第二者とコミュニケーションを行うならば、第一者は最初の第二者とのコミュニケーションの際の齟齬が、自らの p 解釈によるものか、それともその第二者の特有の信念によるものかを、より正確に推測することができる。また別の状況における E をコミュニケーションの対象にするなら、p の解釈適用範囲に関して第一者はより学習することができる。こうしてコミュニケーションを重ねてゆくなら、第一者は発話規則に関して成立のパターンを認知できるようになるだろう。このパターンこそは、発話規則の指針であり、これはコミュニケーションを重ねることによってしか得ることができない。

こういったコミュニケーションを欠いてしまっては、学習者が何度も（正しい）発話規則を暗誦しても、その学習者は常にその発話規則の誤適用の危険性を払拭できない。同じ発話を同じ状況下で何度も繰り返して言う(say)反復は、同じ発話を異なる状況下で繰り返して使う(use)反復と区別されなければならない。前者は、発話に伴う運動技能の習得には効果的かもしれないが、発話規則の習得には問題が残る。発話規則の習得を可能にするのは、コミュニケーションにおける後者の反復である。

「○○と言いたいときには××と言う」という日常的な規則（発話規則）は、E-言語規則同

様その存在を否定されるべきではない。だがこれらの規則は、言語習得・使用において補助的なものであり、言語習得・使用を構成しているのではない。構成しているのはI-言語規則とパフォーマンス・システム規則である。とはいえ臨界期と言語入出力の量の点で不利な第二言語習得においては、補助的なE-言語規則と発話規則が重要になってくる。そのうちの発話規則は机上の学習でなく、コミュニケーションを重ねることによって習得される。したがって第二言語習得においては、音読・シャドーイング、あるいは他の何らかの手段によって基本的なI-言語規則とパフォーマンス・システム規則の獲得が成立したら、後は発話規則をE-言語規則と共に必要に応じて補ってコミュニケーションを重ねることが言語習得への途であるといえよう。

注

(1)誤解を排するために述べておくと、Chomsky は"I-language"という言い方をし、「I-言語規則」(I-language rules)といった言い方はしていない。ここではI-language を理論的に明示的に表象したものをI-言語規則と呼んでいる。

(2)ここで"language-speaking rules"という表現を使い、"language use rules"という表現を使わなかったのは、Chomsky(2000)が"language use"を極めて限定的な意味で使用しているからである。無論ここでいう"speak"は"Do you speak English?"といった用法に見られるように極めて広い意味を持っている。

(3)Canale and Swain (1980)もここでいうパフォーマンス・システムの理論的解明に対して懐疑的な見解を示している。

(4)発話規則の条件は、単純な条件(if)とし、双条件(if and only if)とはしなかった。解釈理論の構築で、Davidson は双条件で解釈するべき文の真理条件を提示したが (Davidson 1984)、それは発話の場所と時間を特定した上でのことである。そのような特定化をせず、発話の産出と理解に関して一般的な規則性を述べようとするなら、*p*と*u*は双条件で厳密に一対一対応させるわけにはゆかない。意味と形が、どのような状況においても厳密な一対一の対応関係を持っているというのは極論であろう。したがって一つの*p* (あるいは*u*)に対して、複数の*u* (あるいは*p*) が存在することは十分に考えられる。

(5)これ以降、language acquisition については、経験主義者的な観点を強調する場合は「言語習得」、合理主義者的な観点を強調する場合は「言語獲得」と、訳語を使い分けることとする)。

(6)音読やシャドーイングの有効性に関しては非常に興味深いテーマであるが、本論文ではこれ以上は扱わないこととする。

(7)E-言語規則の実践上の問題点は、ここでは要点だけしめすと、E-言語規則は、外の世界や使用者の心との結びつきを欠いているので、形式的なパターンプラクティスには使えても、実世界の中での言語使用には結びつかないことである。

(8) Grice 流に言うなら会話の原理を投影してということになろうし、Sperber and Wilson 流に言うなら relevance の原理を投影してということになろう。これらの差異に関しては本論文では紙幅の点から割愛する。

参考文献

Canale, M and Swain, M (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, (1) 1. 1-47.

Chomsky, N. (2000). *New Horizons in the Study of Language and Mind.* Cambridge: Cambridge University Press.

Davidson, D. (1984). *Inquiries into Truth and Interpretation.* Oxford: Oxford University Press

Davidson, D. (2001). *Subjective, Intersubjective, Objective.* Oxford: Oxford University Press.

Krashen, S.D. (1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition.* Oxford Pergamon.

Long, M.H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation in the second language classroom. In. M.A. Clarke and J. Handscombe (eds.), *On TESOL'82: Pacific Perspectives on Language Leaning and Teaching.* Washington, DC: Teachers of English to Speakers of Other Languages.

Swain, M. (1985). Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S.M. Gass and C.G. Madden (eds.), *Input in Second Language Acquisition.* Rowley, MA: Newbury House.

Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook and B. Seidlhofer (eds.), *Principles and Practice in Applied Linguistics: Studies in Honor of H.G. Widdowson.* Oxford: Oxford University Press.

Yamaoka, T. (2000). *A Study of the Catalytic Interface Position in Second Language Learning.* Tokyo: Taga-Shuppan.

ウィトゲンシュタイン著、藤本隆志訳 (1976). 『哲学探究』東京：大修館書店

近江誠(1988) 『頭と心と体を使う英語の学び方』東京：研究社出版

鹿野晴夫(1999) 『英語難民を必ず救う本』東京：中経出版

クラーク、グレゴリー著、平野勇夫訳(1993). 『グレゴリー・クラーク先生の「暗号解読法」があなたの英語に奇跡をおこす！』東京：同文書院

国井信一・橋本敬子(2001). 『究極の英語学習法』東京：アルク

シュリーマン著、村田数之亮訳(1954). 『古代への情熱』東京：岩波文庫

鄭讃容(2000). 『英語は絶対、勉強するな！』東京：サンマーク出版

ロンブ、カトー(1981). 『わたしの外国語学習法』東京：創樹社